木の家ネット第八期 小江戸川越総会レポート
蔵の町 川越での「開かれた総会」

川越の蔵造りの町並み。この町では、人の一生より家の寿命の方が長い。

1 2 3

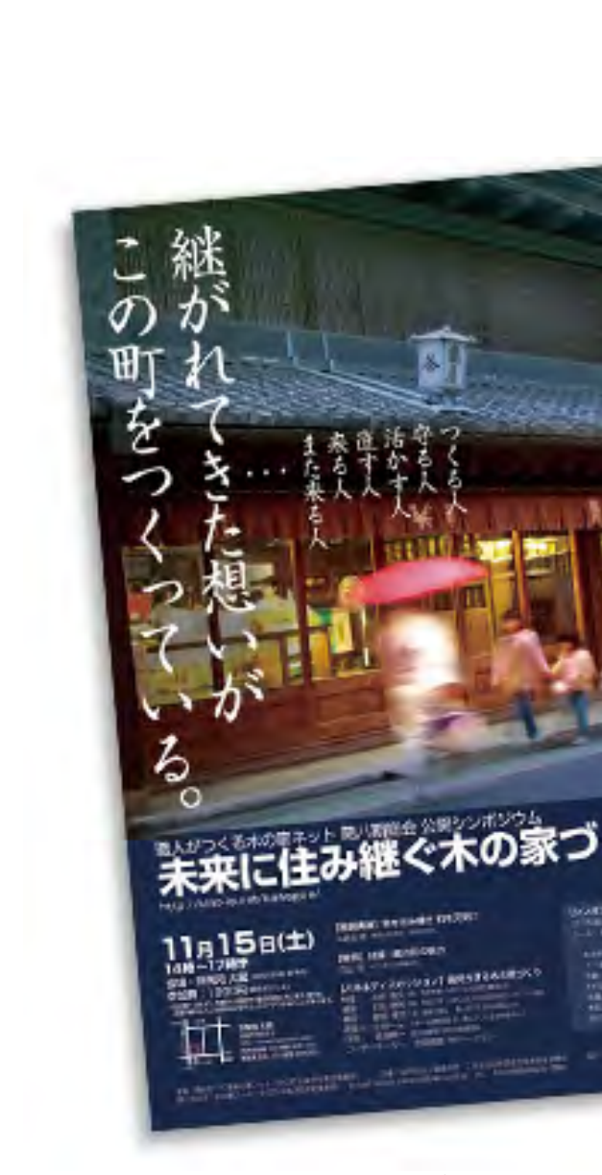
Like 0　ポスト

一般の人と木の家づくりを考える場をつくりたい

2008年11月で第八期を迎えた職人がつくる木の家ネット。11/15〜16、埼玉県の川越市で毎年恒例の総会を行いました。春先から埼玉の木の家ネット会員を中心に「木の家ネット第八期総会・小江戸川越大会」のための実行委員会を立ち上げ、月１回のペースで川越の集会場に集まり、内容を練り上げていきました。

昨年後半から今年の１年間、伝統構法の家づくりがしにくい面も増えた改正基準法施行後のきびしい情況の中にあって、木の家づくりがしやすくなるように活動してきた木の家ネット。「確認申請の厳格化」の運用が現場にもたらしてきた不具合や建築基準に対する修正要望などについて国土交通省との意見交換をしたり、7月12日には伝統木造関係の他の団体と協働して公開フォーラム「このままでは伝統構法の家はつくれない！」を開催したり、これから３年間かけて国が行う伝統構法の位置づけのための検討事業に関わったりと、積極的な活動を展開してきました。そうしたもりあがりを「木の家づくりがしやすくなること」へと結びつけていくためには、木の家についての理解をより多くの人たちへと広げていくことが必要なのでは？ということが、課題として浮かび上がってきました。であれば、全国から多くの会員が集まる総会という機会に、多くのみなさんといっしょに木の家づくりを考える場をつくろう！ということで、「公開シンポジウムの開催」が、今回の大会実行委員会の大きな目標となりました。

人々の想いが美しい町並みを今につないできた、川越だからできること


継がれてきた想いが この町をつくっている。
未来に住み継ぐ木の家づくり
11月15日(土)

ちらしを見る(川越の町がなぜ今のような姿で残って来たのか、裏面で紹介しています)

今回の総会の開催地である川越は、江戸時代に商業都市として栄え、明治時代の大火後に、しっかりとした木組みに塗り壁をほどこした「蔵の町」として再生されました。明治の頃に建てられた蔵の町並みが今までに残っているのは、町の多くの人達や住まい手の連携、協力があったからこそです。さまざまな人々の想いがつながることで木の家が住み継がれ、それが町並みとなっている。そんな川越の町でこそ、木を組んでつくり上げる「木の家」がどんなものなのか、木の家が住み継がれていく想い、そしてそんな木の家が建ち並んで町並となった時の美しさを実感できるにちがいないということで、公開シンポジウムのテーマは「未来に住み継ぐ木の家づくり」としました。

NPO 川越蔵の会

協同組合 伝統技法研究会

実行委員会副委員長の綾部孝司さんは川越地元３代目の大工ですが、ほかのメンバーは県内に住んでいながら意外と川越のことを知らず、大会に向けて集まりを重ねるたびに、あらためて川越の良さを実感していくことになりました。蔵の町の保存再生や利活用を考えるNPO法人「川越蔵の会」、改修・修復に実際に携わった「伝統技法研究会」のみなさん、そして明治の大火以前から残る古い大蔵をギャラリーやコンサート会場として使えるイベントスペースとして再生し、今回のシンポジウムの会場として使わせてくださった茶陶苑の山崎さんなど、川越の町に関わる多くの方たちと大会メンバーとの出会いの中で、公開シンポジウムの内容はより川越の町づくりの具体的な事例に即したものとなり、シンポジウム参加者たちと午前中町歩きをするといった楽しいプログラムへとふくらんでいきました。川越の町じゅうにシンポジウムのポスターが貼られ、町歩きやシンポジウムへの参加者が集まりました。小江戸川越大会の前の週には、川越で環境イベント「川越アースデイ」が開催されましたが、公開シンポジウムの前宣伝を兼ね、大会実行委員会メンバーをはじめとする木の家ネットの有志が出展することにもなりました。

川越で蔵の町の保存再生に携わる方たち、蔵づくりの家に住み、店を使い続けている方たちとともに。そして、一般市民のみなさんとともに。今回の総会を準備してきた日々は、町並みや環境という切り口で、大会メンバーがその輪を広げ、まわりと関わり、影響を与えあいながら、自らも成長するプロセスそのものでした。そしてそのことは、当日、大蔵に集まった蔵の会や伝統技法研究会のメンバー、木の家ネットのメンバー、そしてイベントに集まってこられた一般の参加者を「木の家づくりによる町づくり」という共通のテーマで結びたいという当初の願いをかなえたのです。ここでは、プレイベントとしてのアースデイ、町歩き、公開シンポジウム、そして恒例の会員交流行事である総会というもりだくさんな二日間の一連の流れを、大会メンバーの報告でふりかえります。

プレイベント：川越アースデイ2008

木の家ネット小江戸川越（埼玉）大会の一週間前に、同じく埼玉県川越市にてアースデイという環境イベントが開催されました。アースデイとは、1970年にアメリカで生まれた「地球のことを考える」「地球に感謝する」というイベントで、ざまざまな表現で地球環境への関心をアピールすることを目的としています。現在では世界各地で開催され、規模や形態も多様に行われています。

木の家ネット小江戸川越大会の実行委員では、これを総会のプレイベントとしてとらえ、有志を募り、参加することにしました。当日は朝早くから地元埼玉のメンバーに加え、千葉や山梨からも多くのメンバーが集まり、賑やかなスタートとなりました。日ごろから無垢の木を扱い、長持ちする家づくりを実践しているメンバーにとっての「いつもの仕事」の一部を公開することで、環境に優しい素材や家づくりをアピールすることにしました。

川越でのアースデイの会場となったのは、旧市街地の中に市民運動によって保存された、「旧織物市場」という建物です。両サイドに長屋形式の建物が並び、真中の通路が中庭のようになっているこの建物は以前、織物の市場として賑わいを見せていたそうです。現在は市民団体などによって、様々なイベント等に活用されています。

左／伝統構法の継ぎ手仕口模型をつかって、子どもに木組み体験をさせている、木の香の松田さん 中／来た人たちと楽しそうに話しながら、込み栓ストラップなどの木工品を販売した小町さん 右／のみを扱う子を教える綾部工務店の若い大工さん

いくつかの団体が参加している中で、木の家ネット有志メンバーでは、木の家ネットのパネル、木の家の巨大模型、継手仕口模型の展示、部分実大模型の建方、鉋削り体験、チョウナ削り実演、込栓ストラップ製作・販売など、実際に目で見たり、手で触れたりできる内容を中心に用意していきました。

開始直後から、子供たちや家族連れが多く押し寄せ、木の家づくりのひとつひとつの要素を楽しみながら知ることで、地球環境を考えるきっかけになっていただけのではないかと思っています。もちろん翌週に控えた公開シンポジウムの宣伝も積極的に行い、多くの皆さんにアピールできたことは大きな収穫となりました。

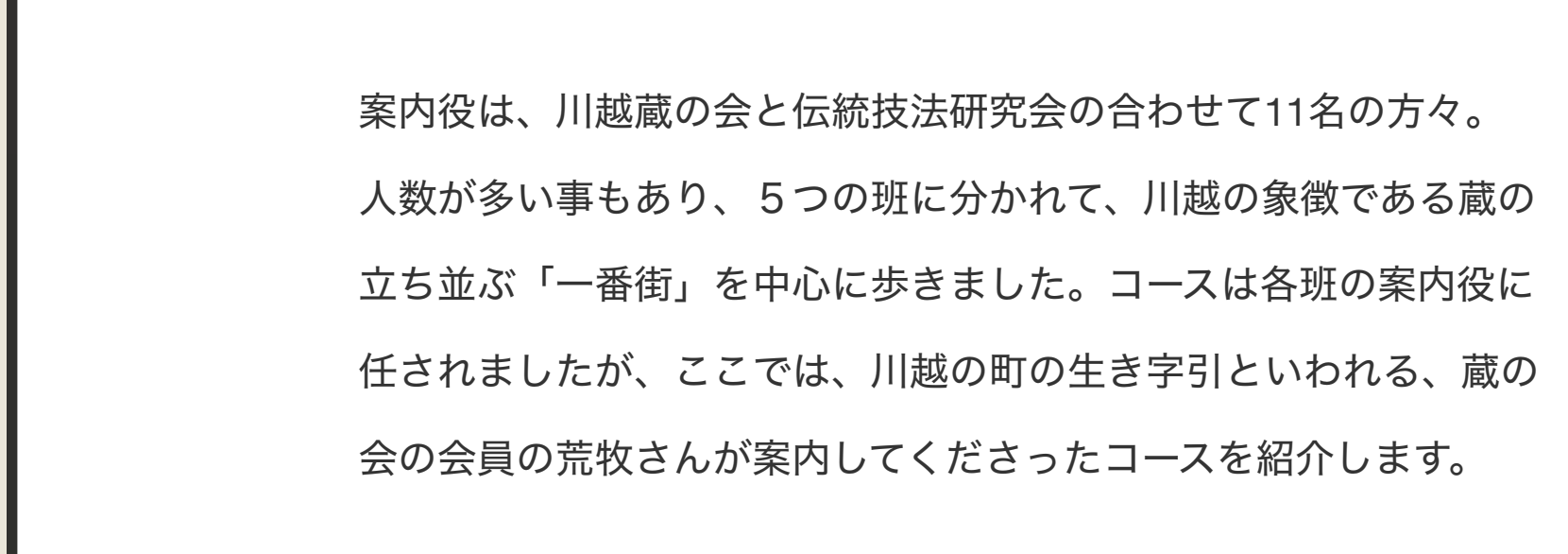
※アースデイの告知記事は こちらへ。

（けやき建築設計　畔上順平）

15日午後のプログラム：蔵の町川越 町歩き

公開シンポジウムに先立つオプションプログラムとしての町歩きには、木の家ネット会員と一般参加者を合わせた約70名が参加。定員の設定をしていましたが大幅に超えてしまい、川越の町への関心の高さがうかがわれました。

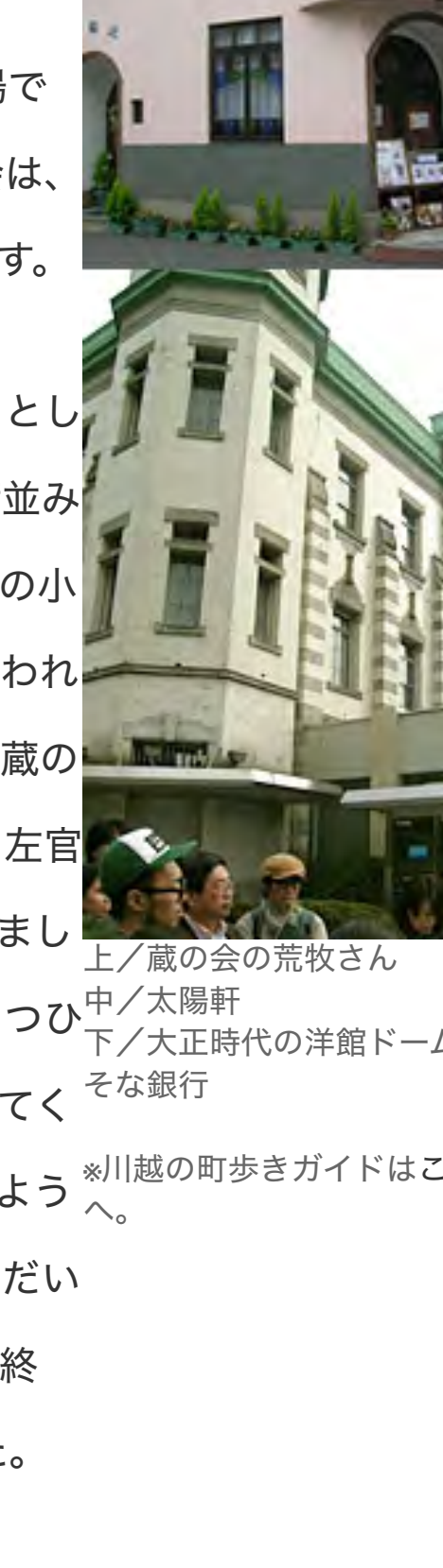
案内役は、川越蔵の会と伝統技法研究会の合わせて11名の方々。人数が多い事もあり、５つの班に分かれて、川越の象徴である蔵の立ち並ぶ「一番街」を中心に歩きました。コースは各班の案内役に任されましたが、ここでは、川越の町の生き字引といわれる、蔵の会の会員の荒牧さんが案内してくださったコースを紹介します。



亀屋山崎茶店 茶陶苑。　左／左から店蔵、袖蔵、レンガのアーチをくぐると中庭になっている。
右／中庭に面して立つ大蔵。明治の大火にも焼け残った貴重な建物だ。

集合＆出発地点は、午後のシンポジウムの会場でもある山崎茶陶苑の中庭です。店蔵と袖蔵を中庭から見たあと、煉瓦蔵の門を潜って、一番街の仲町交差点から西にのびている通りに出ました。まずは、茶陶苑の並びにある原田家住宅の豪壮な蔵、そして島崎藤村の定宿であったという登録文化財の佐久間旅館を外側から見学した後、一番街と平行している裏通り（同心町）に入りました。道すがら洋館造りの歯医者さんやステンドグラスの入った大正時代の建物を見ながら、川越の町のシンボルである「時の鐘」をめざします。

「時の鐘」付近は、都市計画街路事業によって道路も石畳になり、近年とみに観光客でにぎわうようになっているところです。と「時の鐘」は今から約400年前、当時の川越藩主だった酒井忠勝によって創建されて以来ずっと、川越の町に時を告げてきました。木造3層のやぐらで高さは約16メートル。創建当時はほかにない高層建物として、目立ったことでしょう。度重なる火災で、今残っているのは明治26年の川越大火直後に再建された４代目にあたります。午前6時・正午・午後3時・午後6時に鳴る鐘の音は「残したい日本の音風景百選」にも選ばれています。後から聞いた話では、ある班は正午ちょうどにここに来て、鐘の音を聞いたそうです。



上／蔵の会の荒牧さん
中／太陽軒
下／大正時代の洋館ドーム、りそな銀行

※川越の町歩きガイドはこちらへ。

ここから伝統的建物保存地区「一番街」に出ると、蔵の立ち並ぶ様子が美しく、輝いているように見えました。一番街に面する重要文化財、大沢家住宅は川越で一番古い蔵です。明治26年の大火にも消失せずに残ったため、復興時に大沢家のような蔵造りで町を再建することになったということで、今の川越の蔵の町が形成されるきっかけとなった、重要な建物です。大火後に新しく建てられた蔵に比べて、屋根は軽やかです。大火後の蔵は、江戸日本橋に対する憧れから、派手になっていったようです。ここで案内の荒牧さんは「一番街はいつでも見れるからね」と言って、大沢家の脇から再び静かな路地に入りました。修復された洋食屋さん「太陽軒」、NPOにより運営されている映画館「スカラ座」、懇親会の会場である「初音屋」の前を通り、長屋にたどり着きました。蔵の会は、この長屋の一軒を借りて、事務局として使っているのだそうです。

再び一番街に戻り、蔵の街並みを歩き、埼玉りそな銀行の堂々とした洋風建築を眺めました。蔵と洋風が混在していることが、街並みを一層楽しいものにしていると感じられます。りそな銀行の隣の小林家住宅では、近年、傷んで崩れていた外壁の修復工事が行なわれました。設計監理は伝統技法研究会、施工は風基建設です。店蔵の奥の文庫蔵前に施主の小林さん、伝統技法研究会の遠藤さん、左官工事の加藤さんが揃って出てくださり、詳しい説明をしてくれました。施主の小林さんは美しい姿を取り戻した蔵の収蔵品をひとつひとつ整理し、きれいに展示し、機会をつくっては、蔵を公開してくださっています。一時は取り壊しを考えていたという蔵がこのように再生され、私たちの目に触れることができるようにしていただいているとは、ありがたいことです。ここで、１日目の街歩きは終了、10時半からたっぷり２時間、川越の町歩きを楽しみました。

※川越の町歩きガイドはこちらへ。

（千尋建築事務所　奥隅俊男）

Like 0　ポスト

1 2 3

左／小林家の文庫蔵の外観。フックが何カ所か出ているのは、改修工事の際に足場をかけるためのもの。改修を見越したしくみが新築時に組み込まれているのだ。右／文庫蔵の中には、生活用品、工芸品などが展示されている。

木の家イベントカレンダー

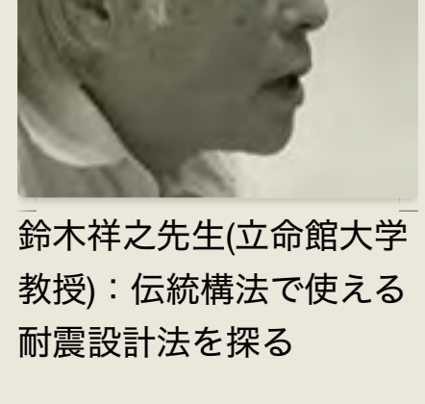
最近の特集記事
2019年6月15日 やさしくて強い、理想の家を求めて: アイ設計研究室 大前泰秀さん
2019年5月15日 磨き上げた職人技で、木を生かす：西岡建築一級建築士事務所　西岡健一さん
2019年4月20日 大工と左官の職人プロジェクトチーム 総合建築植田 植田俊彦さん 俊司さん
2019年4月10日 本物の家づくりを、自由に、楽しんで：株式会社木神楽　高橋一浩さん
2019年1月5日 新春特集 2018年のベストショット集
2018年12月29日 板倉仮設住宅 移設ものがたり part3 大工の声＆今後の課題編
2018年12月17日 板倉仮設住宅 移設ものがたり part2 実録編
2018年12月14日 板倉仮設住宅 移設ものがたり part1 概要編
2018年9月4日 番匠 剱持工務店 副棟梁・剱持大輔さん
2018年8月15日 鶴岡総会予告 その１　散るより、生き延びよ！

人気のある記事
冬の温熱調査合宿報告 15件のビュー
大工たちによる「家戻し」の記録 13件のビュー
込み栓角ノミ 復活！松井鉄工所訪問記 11件のビュー
設計士・丹羽明人さん(丹羽明人アトリエ)：納得できる答を探して 11件のビュー
第三回これ木連フォーラム「伝統構法はこれからどこへ向かうのか？」の報告 11件のビュー
「職人がつくる木の家」づくりを未来につなげるアンケート 11件のビュー
古川 保の熊本市川尻町 震災日誌 11件のビュー
伊勢神宮遷宮・御杣始祭り：300年の大木を伐る！ 11件のビュー
工務店・西條正幸さん(ピオプラス西條デザイン)：北海道で無垢の木の家づくり 10件のビュー
設計士・川端眞さん（川端建築計画）：小さな石場建ての家 10件のビュー

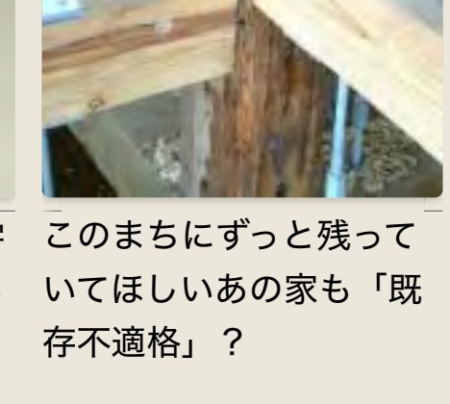
この記事のタグ
このまちなみを次世代に
建築基準法と伝統構法
顔の見える家づくり

同じタグがついた別の記事
2004年6月25日 火の用心（後編）
2016年1月14日 第15期 木の家ネット総会 高知大会 〜会員発表篇〜
2001年11月25日 工務店・渡邉隆さん(風基建設)：五十年後、百年後に木の家が残る環境をつくること
2010年1月16日 新潟県中越地震被災地訪問レポート
2003年12月25日 土壁告示

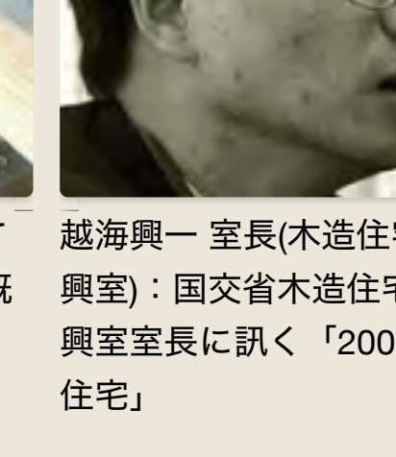
関連する記事はこちら



鈴木祥之先生(立命館大学教授)：伝統構法で使える耐震設計法を探る



このまちにずっと残っていてほしいあの家も「既存不適格」？



越海興一 室長(木造住宅振興室)：国交省木造住宅振興室室長に訊く「200年住宅」

NPO関善賑わい屋敷・曳家工事：この家が動く！

伝統構法をユネスコ無形文化遺産に！

木の家ネット第八期
小江戸川越総会レポート
「未来に住み継ぐ家づくり」を
みんなで考える

シンポジウムの１コマ。コーディネーターの赤堀さんの質問に対して、参加者が赤、黄、青のカードを掲げてこたえる。

1 2 3
Like 0　ポスト

午後1時を過ぎ、昼食を済ませた町歩きからの参加者が戻り、新たな参加者も加わり、シンポジウムの開催会場となる茶陶苑前の広場が朝の町歩きの集合時間以上に賑わいだしました。その人の流れが、大きな蔵の薄暗い中に、吸い込まれるように入り込んでいった時、みなさんは、太い柱、白い壁にタテヨコに格子を組んだむき出しの柱と貫の空間をきょろきょろと見回し、その壮大さ、力強さに驚いた様子。時間が刻まれたことを実感できる空間には理屈はいりません。この空間のすばらしさは、参加者の記憶にしっかりと刻まれたにちがいありません。

概ね定員200名の来場を得て会場は満員となり、主催側としてはまずはひと安心。会場のレイアウトは、蔵を横長く使い、パネラーを扇状に囲むようにすることで参加者との距離を近づける椅子配置としましたが、これは茶陶苑の山崎さんからの提案でした。声もよく通り、マイク無しでも十分に聞き取れる距離感はたいへん良かったのではないでしょうか。

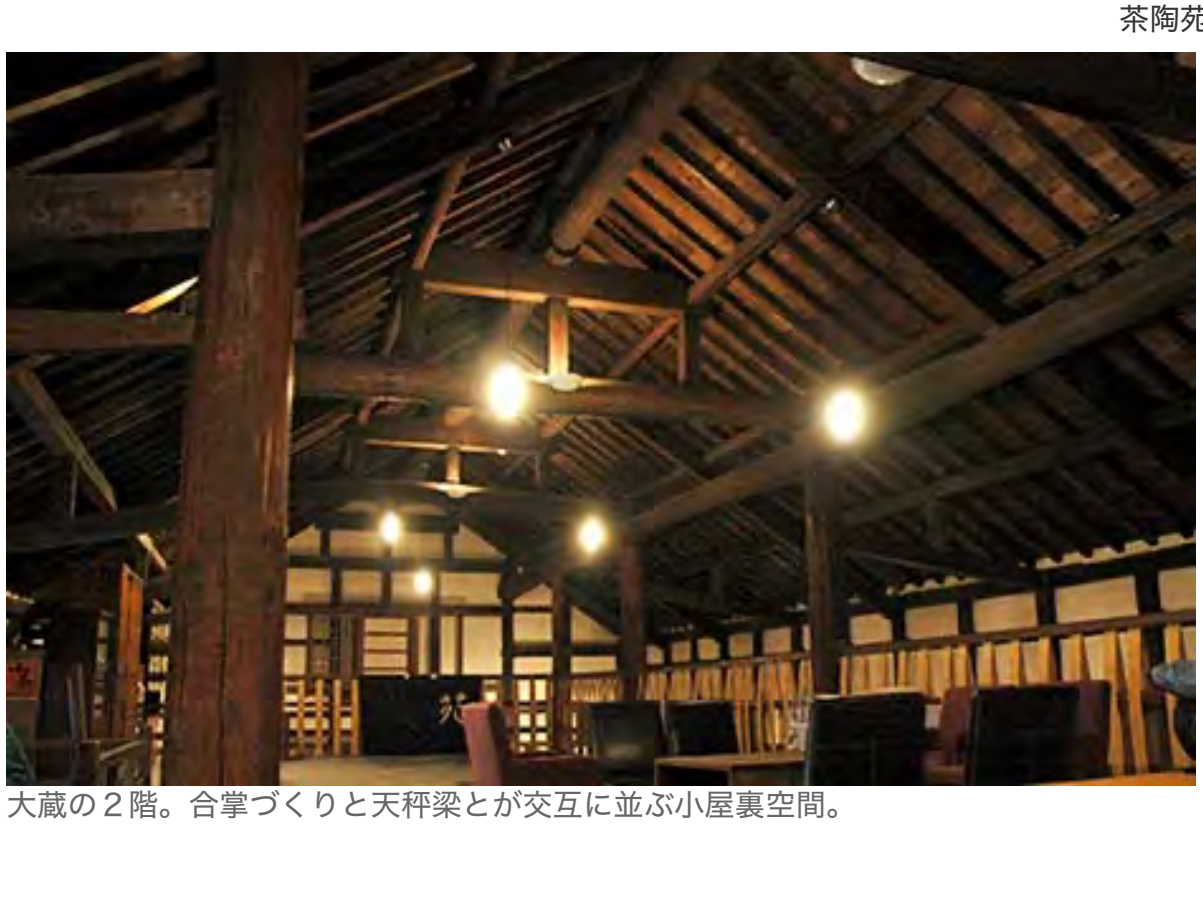
「家を住み継ぎ　まちを元気に」
亀屋山崎茶店 茶陶苑　山崎正博氏

茶陶苑の大蔵は、江戸は嘉永3年（1850年）に元は味噌の醸造蔵として建てられ、明治26年(1893年)の川越大火にも生き残った、一番街付近では数少ない建物です。まずは、茶陶苑の大蔵を、人の集まれるスペースとして再生・活用された茶陶苑店主の山崎正博さんのお話をうかがいました。

若い頃に川越を離れ、アメリカやヨーロッパで仕事をしていた山崎さんが、実家の建物を再生しようという気持ちになったのは、ヨーロッパで古い建物がうまく住み継がれ、現代に合った形に使われているのに出会ったからでした。「再生するのであれば、これからも使えるように」という意思をもって、経済的な問題、文化財保護の問題、技術面でクリアすべきことなどに取り組んで来られました。現在では、ふだんはお茶にまつわる陶器など山崎家のコレクションを展示するギャラリーとして、そして年に数回は蔵の音響効果を活かしたコンサートホールとして活用されています。詳しくはこちら。

山崎さんのお話は、一般の方にはいささか専門的であったかもしれませんが、年月とともに朽ちていくにまかせていた頃は重荷でもあった建物が、利活用を前提とした再生工事を経て、自信をもって未来に継いでいける建物へと変容していくプロセスをうかがうことができ、大変興味深いものでした。実際に再生された蔵の中でその再生の物語を聞くことができるということで、臨場感をもって参加者のみなさんに聞いていただけたことと思います。

茶陶苑


大蔵の２階。合掌づくりと天秤梁とが交互に並ぶ小屋裏空間。

お話の中でもっとも印象に残ったのは、建物を再生するために取り組んだ施主として、どういうことを実現したいのかということを関係者にしっかりと伝える意思と姿勢の大切さです。最後の締めくくりに山崎さんはこんなことをおっしゃいました。「もともとの味噌蔵のオーナーやお茶屋の先代が、お墓の下で『何をやってるんだ』と言っているとは、私は思っていません。時代が変っていく中で『好きなようにやりな』と言ってくれていると思います」まさに想いが継がれていくことで、建物がちゃんと生きた形で残った、すばらしい再生事例といえるでしょう。詳しい記録は、こちらをご覧ください。

「川越・蔵の町づくり」
NPO法人川越蔵の会 守山登氏

守山登氏

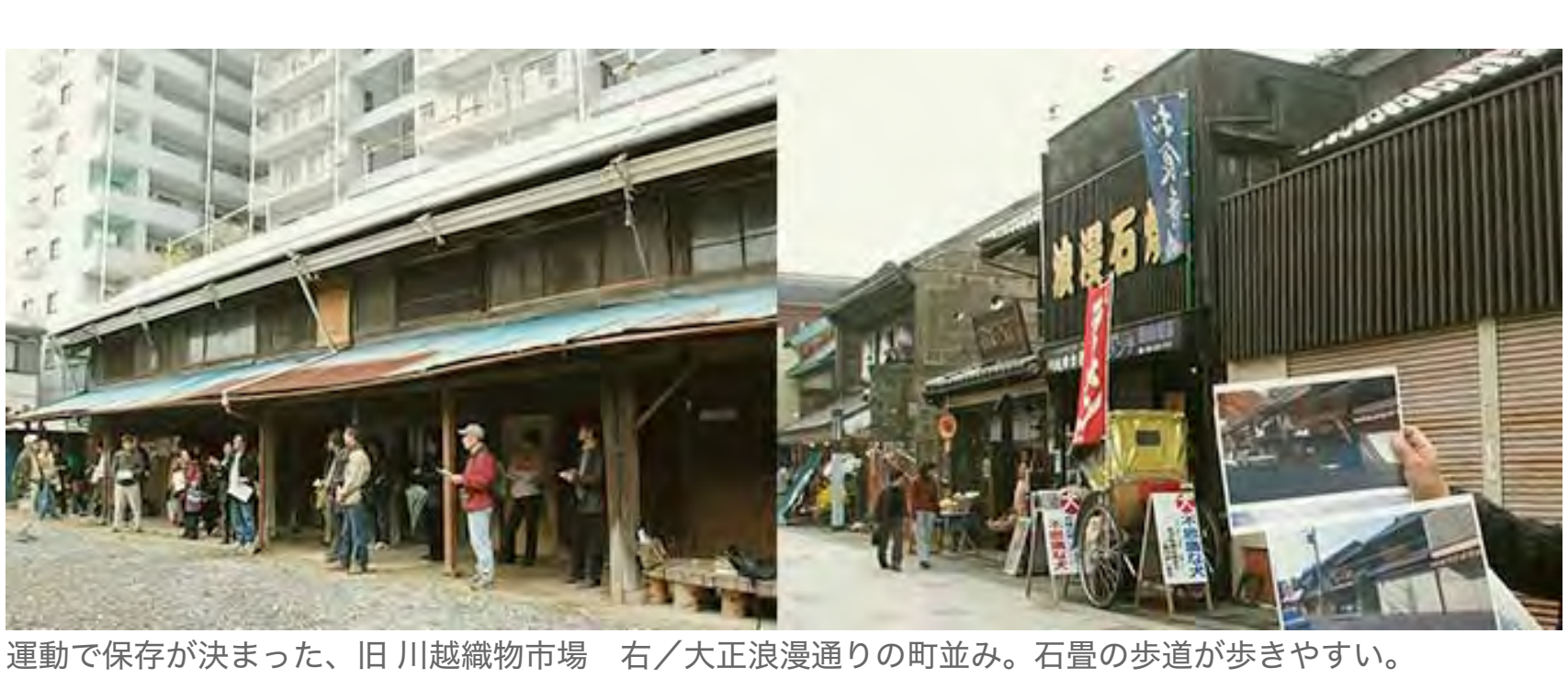
次に、川越を「蔵の町」として再生してきた市民団体「川越 蔵の会」の会員で建築士の守山登さんに、川越の歴史の概略から町づくりの活動、今なお整備が進んで変っていく川越の様子などの報告をしていただきました。町歩きをしたこられた方には特に、見てきたものと守山さんの解説とが具体的につながり、時間がタイムスリップしたかのように見えるこの川越の町も、じつは人の力で変化しつづけており、その結果として今の町の姿があるのだということを実感していただけたのではないでしょうか。

川越の魅力は、江戸時代から伝わる蔵造りの町並みと、明治・大正期に建てられた、当時としては最新のデザインである洋風建築とが混在していることです。建設当時は違和感をもって迎えられていたかもしれない建物も、いまでは大正ロマンの香りが漂う、いい雰囲気を醸し出しています。

その川越も1970年代の万国博覧会前後、高度経済成長にともなって日本が全国的に大きく改造されていった頃には、歴史的な建造物がどんどん新しい商業施設や居住施設に変り、歴史が切り崩されるような危機的な状況に陥りました。今では多くの人々が来る一番街もこの頃は衰退していたようです。

それを見かねて、1983年、川越JCのOB、地元建築家、外部応援団、主婦らが「川越 蔵の会」を結成、（1）住民が主体となったまちづくり（2）北部商店街の活性化による景観保存（3）まち並保存のための財団形成をめざして活動をはじめました。

「川越 蔵の会」の運動で特徴的なのは、商店街の活性化のための町並み保存ではなく、町並み保存の為に商店街を活性化させるという方向性をもっているということです。活性化だけのためであれば、簡単にファサードだけを直して済ませてしまいがちになりますが、歴史的建造物を保存することが結果として活性化につながる、だからこそ、本物として再生することが大事なんだという姿勢を貫いて来たことが、川越の蔵の町の、本物にしか醸し出せない厚みを、生んでいるのでしょう。


左／市民運動で保存が決まった、旧 川越織物市場　右／大正浪漫通りの町並み。石畳の歩道が歩きやすい。

もうひとつ特徴的なのは、住民主導のまちづくりと、主体がはっきりしていることです。歴史的建造物が少しずつなくなっていくのを、市民がディベロッパーとなって再生、利活用することは、守りたい土地や建物を市民で買い取るナショナルトラスト運動と同じ効果を生む。住民がその主体になろう、ということで町並み整備のための委員会を立ち上げ、町づくり規範を制定し、電線の地中埋設、看板や建築物の制限による景観統一などを実現しながら、1990年代に「一番街」や「大正浪漫夢通り」の町並み整備を行っていったのです。

そして1999年、伝統的建造物群保存地区に選定されたことなどが弾みとなり、2000年代に入って一番街の歩道の石畳化と街路灯事業なども展開し、観光客も倍増しています。

2000年代は、まちづくりの確立期。99年に伝統的建造物群保存地区に選定されたことなどが弾みとなり、一番街の歩道の石畳化と街路灯事業なども展開し、観光客も倍増してきています。今では、週末ともなれば、レトロな雰囲気を楽しみながらショッピング、散策を楽しむ人々であふれかえります。今後も、車と人との分離、歯抜けになっている空き地や再生されずに朽ち果てていきかけている歴史的建造物の活用、マンション建設問題など、さまざまな課題がこれからも山積みのようですが、これからも「蔵の町 川越」が古きよきものを守りつつ、より生き生きと発展させていくために活躍していかれることを期待しています。

パネルディスカッション
「未来に住み継ぐ木の家づくり」

休憩をはさんでシンポジウムの後半は、林業、大工棟梁、建築士と、長持ちする木の家づくりに関わる現場の方たちと、長寿命の200年住宅を政策的にバックアップする立場の国土交通省木造住宅振興室の越海室長とがパネラーとして舞台に登場、赤堀さんの司会で木の家をめぐるパネルディスカッションを行いました。

林業：山中 敬久氏（（有）角仲林業・NPO法人伝統木構造の会）
棟梁：和田 勝利氏（（株）和田工芸・NPO法人民家リサイクル協会）
棟梁：綾部 孝司氏（（有）綾部工務店・木の家ネット）
建築士：小林一元氏（小林一元建築設計室・木の家ネット）
行政：越海興一氏（国土交通省木造住宅振興室長）
コーディネーター：赤堀楠雄氏（林業ジャーナリスト）

山中 敬久氏

和田 勝利氏

綾部 孝司氏

小林一元氏

越海興一氏

赤堀楠雄氏

「あなたが大切にしているもの」「あなたが住んでいるのはどんな家？」「今、住んでいる家が好きですか？」といった質問から入り、「今、住んでいる家は100年後、どうなっているでしょう？」と、パネリストも会場もいっしょになってコーディネーターの赤堀さんが発する質問に赤や青や黄の紙をあげて回答しながら考えていったのですが、「解体されてなくなっている」という答がほとんど。ドイツ在住の参加者から「ドイツでは木造建物であっても10年毎にメンテナンス、30年ごとに住まい手が替わり、100年、200年もたせるのは、あたりまえ」というリフォームやライフスタイルに合わせた住み替えの発達した住文化の紹介があり、木の家を長く住み継ぐにはまず、家を社会資産としてとらえる発想への切り替えが必要だということを、つくづく感じさせられました。

その後「木の家の良さとは？」という問いに対して、立場の違うパネラーのみなさんから、それぞれの回答がありました。肌触り、和みの感覚、生活の変化への対応のしやすさ、素材が本物であること、ゴミ問題や山の健全なあり方に貢献できる循環など、さまざまな要素が列挙されました。そうしたよさがもっと社会的に評価されていくことが必要ですが、それに先立って、安ければ、今さえよければそれでいいという大量生産・大量消費の意識から、価値あるものを長く大切に使う、環境に負荷をかけないといった意識へと、意識の変革が行われなければならないでしょう。

最後にコーディネーターの赤堀さんが「長い道のりが必要かもしれませんね」という前置きとともに、あたりまえの、しかしとても大事な指摘でパネルディスカッションを締めくくってくださいました。それは「木を好きになっていただくことがスタートになる」ということです。意識の変革以前に、まずは木のよさ、木の家のよさをよりたくさんの人に知ってもらうこと、木の家づくりが手の届かないことではなく、つくり手は身近にいるのだということを伝えていくところからはじめていくことがまず大事です。木の家ネットがそうした発信媒体として役立っていければと思います。

パネルディスカッションの記録は、こちらをご覧ください。

参加した方のアンケート回答の抜粋です
林業、建築設計、工務店、職人大工などが木の家をつくることによる技術の伝承、経済的に成り立つ仕組みづくりをしていかなければくてはならないことを認識させられました。
戦後日本の経済優先の価値観を植えつけた社会環境や教育のあり方が根本的な問題のように思います。木の家の持つホントの価値をきちんと認識できるように伝えていくことを地道に続けていくこと。これからは量より質の時代、少し高くてもいいもの、ホンモノを！！という価値観の時代にはいってくると思う。
木の家はなごむし、人の社会にとっても合っていると思う。世界に広げたい日本の技術。
会場の蔵の雰囲気が講演者の様々な視点の話とがあいまって、とても心地よい空気の中で有意義な時間をおくることができました。
気持ちが大切だということを本当に思いました。このように気づかせてくれたことに感謝いたします。
実際に仕事をしている方の前向きな意見にいろいろ可能性を見た気がします。子供たちを山に連れて行き、森を見せて育て、その木を切って家をつくるところを見せることができればよいですね。

参加者は、年齢も雰囲気も、実にさまざまでした。

（木住研　宮越喜彦）

「初音屋」の百畳敷きの大広間での懇親会

シンポジウムが終わり、茶陶苑を片付けて、懇親会場の初音屋さんに向かいました。初音屋は昭和初期の建築で、建築にまる２年を要したという川越で最大の「百畳敷き」の座敷で、懇親会が行われました。大広間に長〜い通しの鴨居が何本もわたっていて、立派な座敷です。戦後GHQに接収され、この座敷に絨毯が敷かれ、応接セットが置かれた時期もあったということです。靴のままあがったのかな〜と気になります。

懇親会では恒例の自己紹介。新入会員として、熊本の製材所の杉岡さん、千葉の大工の北見さん、東京の大工の小町さん、神奈川の工務店経営の星野さんが紹介されました。４人とも若い、伝統木造のこれからを切り拓いていく方たちです。楽しみで、頼もしいですね。自己紹介タイムの最後には古川設計室の古川さんが、「次回の総会は 熊本でやらせてください！」と名乗りをあげました。「みなさん遠くで大変ですが、今から積み立てておいてください。また来年、熊本に集まりましょう。」

ひとしきり紹介ごとが済んだ後、ノートパソコンで11月28日と12月4日にE-ディフェンスで行われる、伝統的木造軸組構法住宅の性能検証振動台実験で揺らす関西型・関東型の２棟のモデル棟の施工写真を映し出しながら、モデル棟の仕様について風基建設の渡邊さん、三和総合設計の岩波さんが説明をしてくださいました。それまでそれぞれの席でくつろいでいたメンバーがモニター画面を囲み、食い入るように見ていました。

最後に、座敷が出来た当時から３代後にあたる若い当主が挨拶をしてくださいました。蔵の会の会員でもあります。「この建物をずっと残して行きたいが、心配なのは耐震性。専門であるみなさんに、この建物がもつかどうか、ぜひ教えていただきたい」と、建物の安全性を確保しながら、維持し続けていきたいという気持ちが実感をもって伝わる場面もありました。建築基準法に位置づけようとしているのは、伝統木造の建物を新築する場合のこと。しかし、全国には、住み継がれてきている古い建物がたくさんあり、そうした建物を将来にわたって住み継いでいけるような法律的なバックアップは、まだまだ不十分です。手を入れながら住み継いできた建物を社会的ストックとしてみるのであれば、それを残して行けるようなしくみが必要だな、ということを、初音屋の若主人の話を聞きながら、思いました。

新会員の杉岡世邦さん

新会員の北見明寛さん

新会員の小町歳幸さん

新会員の星野将史さん

初音屋の若主人

「来年は熊本に来てください！」と古川保さん

（木の家ネット事務局　持留ヨハナ）

Like 0　ポスト
1 2 3

懇親会の最後は、３・３・１の川越締め

木の家イベントカレンダー

最近の特集記事
2018年3月27日 伝統建築に携わるすべての職人に光を
2018年2月7日 「伝統建築工匠の技：木造建造物を受け継ぐための伝統技術」ユネスコ無形文化遺産候補選定のおしらせ
2018年1月2日 新春特別企画 2017年のベストショット
2017年12月14日 第17期木の家ネット総会：倉敷大会 -民家改修と曳家-
2017年10月14日 気候風土適応住宅のチラシができました！
2017年9月4日 家のお風呂　こうやって作る、こうやって保つ
2017年8月8日 家にお風呂が入るまで
2017年6月30日 気候風土適応住宅のススメ
2017年6月3日 掛川総会３
2017年5月31日 掛川総会２

人気のある記事
冬の温熱調査合宿報告 15件のビュー
大工たちによる「家戻し」の記録 13件のビュー
「職人がつくる木の家」づくりを未来につなげるアンケート 11件のビュー
古川 保の熊本市川尻町 震災日誌 11件のビュー
伊勢神宮遷宮・御杣始祭り：300年の大木を伐る！ 11件のビュー
込み栓角ノミ 復活！松井鉄工所訪問記 11件のビュー
設計士・丹羽明人さん(丹羽明人アトリエ)：納得できる答を探して 11件のビュー
第三回これ木連フォーラム「伝統構法はこれからどこへ向かうのか？」の報告 11件のビュー
工務店・西條正幸さん(ビオプラス西條デザイン)：北海道で無垢の木の家づくり 10件のビュー
設計士・川端眞さん（川端建築計画）：小さな石場建ての家 10件のビュー

この記事のタグ
このまちなみを次世代に
建築基準法と伝統構法
顔の見える関係

同じタグがついた別の記事
2009年12月25日 速報！アンケートの全回答とまとめ
2007年12月26日 宮大工・宮村樹さん(不動舎)：現場が先生
2009年1月26日 伝統木造設計法構築に向けて、実物大実験！
2004年10月25日 NPO関善賑わい屋敷・曳家工事：この家が動く！
2001年11月25日 工務店・渡邊隆さん(風基建設)：五十年後、百年後に木の家が残る環境をつくることと

関連する記事はこちら

鈴木祥之先生(立命館大学教授)：伝統構法で使える耐震設計法を探る

このまちにずっと残っていてほしいあの家も「既存不適格」？

越海興一 室長(木造住宅振興室)：国交省木造住宅振興室室長に訊く「200年住宅」

NPO関善賑わい屋敷・曳家工事：この家が動く！

伝統構法をユネスコ無形文化遺産に！

事務局
〒711-0906
岡山県倉敷市児島下の町5丁目7-3
児島舎内
mail：jimukyoku@kino-ie.net
tel：086-486-5464

木の家ネット第八期
小江戸川越総会レポート
見どころいっぱいの川越」に
興味は尽きることなく

分科会には分かれず、全員で話をした夜の部

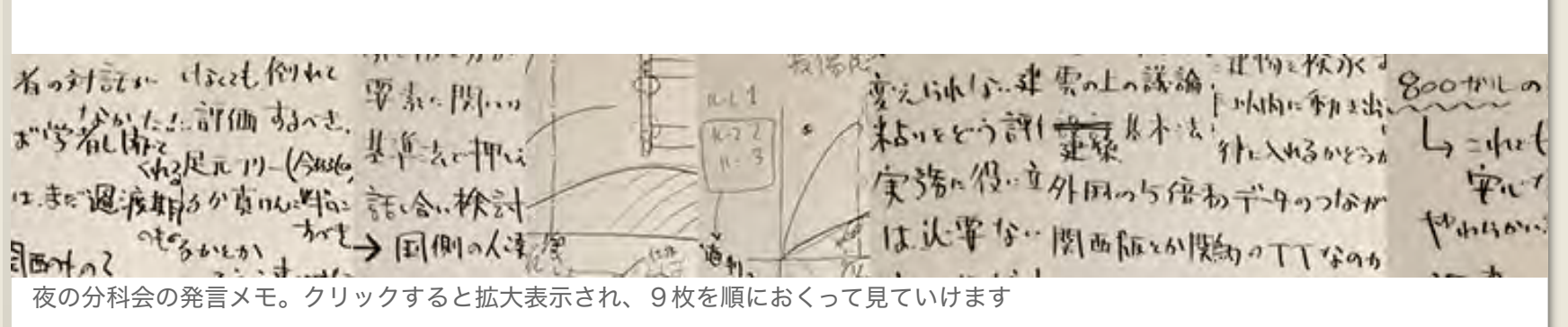
1　2　3

松村屋さんで夜の分科会、話題の中心は伝統的建物の実大実験のこと

懇親会終了後は松村屋旅館さんに移動、総会の夜の目玉として、定着している夜の「分科会」が行われました。これまでの総会でも熱いテーマで激論が交わされてきましたが、今回は時間に広間に集まりだした会員の誰からともなく懇親会の最後に見た実験の試験棟の話題が出て、結果的には部屋に分かれることなく全員で、そのテーマについて話したり聞いたりしました。実験に実務者として関わりのある委員になっているメンバーも数人いて、詳しい事情を聞くことができ、とても有意義でした。

今回話題になっている実物大性能検証振動台実験は、平成20年度から始まった「伝統的木造軸組構法住宅の設計法作成及び性能検証事業」という国の事業の一環として行われるものです。2007年6月に改正された建築基準法の厳格化により、位置付けの曖昧な伝統構法・伝統的工法の住宅がつくりにくい状況に陥ったという状況を踏まえて、国では伝統構法の構造的な安全性の検証を行い、建築基準法の中に位置づけようと考え、このような事業に取り組むに至ったのです。建物の要素が地震動に対してどうふるまうかを実験し、そのデータの解析を行うことで、伝統木造の設計法を構築しようというのです。

この事業を遂行するにあたって、各関連課題作業（タスク）チームが編成されましたが、その中に実務者メンバーとして木の家ネットの会員が何名か加わっています。そのメンバーから、振動台に乗ることになっている実験棟の仕様についての話を聞くことができました。このことに関わりの少ないメンバーにとっては、イメージしにくい場面もありましたが、実験をする意義、実験後の解析により新しい計算法が確立される期待が寄せられていることがわかりました。



夜の分科会の発言メモ。クリックすると拡大表示され、９枚を順におくって見ていけます

実験、検証、設計法の構築といった流れに対して、肯定的な意見ばかりではなく、計算法にだけ頼るのではなく、現在残っている古い建物、地震をくぐり抜けてきた建物の要素を再評価し、今後もそういった建物がつくれるようにしていくべきではという意見も、多く出されました。基準法の中に伝統木造の位置づけるという視点での伝統木造建物の実大実験は初めて行われることであり、未だ過渡期にある段階です。今回の実験の結果や解析によって、また違った方向性が見えてくるのではないかと期待したいところです。

（けやき建築設計　畔上順平）

翌朝、ふたたび茶陶苑へ第８期の運営方針を話し合った総会

一夜明けて、二日目の朝はふたたび茶陶苑に集合。木の家ネットのメンバーだけで木の家ネットの運営について話し合う「総会」を行いました。会計の衣袋さんから会計報告、第八期の収支予算案の説明などがあった後、事務局から、第七期のふりかえりということで、建築基準法と伝統構法とのそもそもの関係、対・国交省との折衝の記録、7/12のシンポジウム「このままででは伝統構法の家がつくれない！」鈴木祥之先生のインタビューなど、重要な項目についてはこれまでのコンテンツを紹介しながら、動きが活発であったこの一年の流れを追い、その背景説明をしました。

これからの木の家ネットをどうしていこうか、という話し合いもしました。第七期では、上記のような大きな動きがあったこともあり、伝統構法をめぐる法整備についての少しむずかしいコンテンツが多かったのですが、これからもそうした動きの要点はしっかりおさえつつ、より住まい手側の視点に立った情報発信をしていくことも必要なのでは、という話になりました。

肯定的な意見ばかりではなく、計算法にだけ頼るのではなく、現在残っている古い建物、地震をくぐり抜けてきた建物の要素を再評価し、今後もそういった建物がつくれるようにしていくべきではないかという意見も、多く出されました。基準法の中に伝統木造の位置づけるという視点での伝統木造建物の実大実験は初めて行われることであり、未だ過渡期にある段階です。今回の実験の結果や解析によって、また違った方向性が見えてくる期待感を強く感じました。

コンテンツで振り返る第７期の動き

伝統構法、建築基準法に位置づけられていない？

建築基準法と伝統構法の関係の歴史をお勉強しましょう〜

「長寿命の伝統木造を「200年住宅」としてとらえていきたい」国交省の越海さんのインタビュー

7/12に行ったシンポジウム「このままでは伝統構法の家がつくれない！」の、分かりやすい記録

石場立てをするのにこれまで現場が頼って来た「限界耐力計算法」について、鈴木祥之先生にインタビュー

今年度の方向性をみんなで考える。

具体的には、住まい手の方に直接インタビューして構成する「木の家ネットのつくり手がつくったお宅を拝見！」コンテンツ、来年から強制加入が義務づけられる「瑕疵保証制度」についての分かりやすい解説などが考えられそうです。「『お宅拝見！』コンテンツにネタを提供できる人〜」と会場に呼びかけると、さっ！と手があがるつくり手が多いのにはおどろきました。つくり手と住まい手との関係がよっぽどいいからこそ、住まい手に確かめる以前にさっと手があがるのだということでしょう。来年には新コンテンツを公開できるよう、今期のコンテンツ＆取材計画を事務局で練り上げていきたいと思っていますので、読者のみなさんも、お楽しみに！

（木の家ネット事務局　持留ヨハナ）

オプションツアー１：
プロ向け町歩きで大正浪漫通り、旧織物市場、川越キリスト教会へ

蔵の会の働きかけによってアーケードが外され、明るくなった大正浪漫通り。手前の建物は「和菓子屋いせや」

総会は午前中いっぱいで終わり、めいめいで昼食をとったあと、午後はオプションツアー。「プロ向け川越 町歩き」と「遠山記念館見学」と２班に分かれて行動しました。

町歩き班には、木の家ネット会員の約40名が参加しました。昼食後、12時半頃に茶陶苑前に集合しました。案内役は蔵の会会員の４名と伝統技法研究会会員の３名（そのうち１人は木の家ネット会計の衣袋さん）です。特に班分けをすることもなく、全員で町歩きをしました。前日は茶陶苑から北の「伝統的建造物保存地区」を中心に散策しましたが、２日目は茶陶苑から南へと散策し、最終的に喜多院に向かいました。

茶陶苑を出ると、通りの反対側に洋風建築の商工会議所の建物があります。ここから先が大正ロマン通りです。以前は覆い屋根が掛けられたアーケード商店街でしたが、屋根を取り、電線を地中化し、外灯を低くして、通りを整備したのです。大正ロマンをモチーフにした街つくりをしていて、デザインコンペなども行なっています。「和菓子屋いせや」は蔵の会のメンバーにより、新築されましたが、周りの洋風建築に合わせて設計されています。大正ロマン通りから連馨寺に向かい、途中にある旧鶴川座の内部を見せていただきました。ここは明治時代の芝居小屋だったところで、調査を担当している衣袋さんから説明がありました。回り舞台などが残されていますが、大正時代に大きく改造され、映画館などに利用されていたようです。明治時代の芝居小屋の姿を想像しながら見学し、次の見学地である旧織物市場に向かいました。

旧織物市場は２棟の長屋状の建物が向かい合う、明治時代の建物群です。５の日と10の日に、両側にずらっと川越の織物商が店を出す織物市場が開催されていました。こうした昔の織物市場がほぼ完全な姿で残っているのは全国で唯一だそうです。明治時代に迷い込んだような錯覚に陥ってしまいそうな、不思議な空間でした。総会の１週間前には、ここで川越アースデイというイベントが行なわれ、木の家ネット有志も参加し、パネルや軸組み模型の展示、カンナかけやチョウナはつりの実演などを行ない、評判を呼びました。この旧織物市場はマンション計画により解体の危機にありましたが、市民運動で救われたというお話を伺う事が出来ました。

昔、遊郭だったという趣きのある建物。

旧織物市場から、佐久間旅館向かいにある煉瓦造りの川越キリスト教会に向かいました。昨日外から見学した班もありましたが、二日目には教会の内部に入っての見学が出来ました。パイプオルガンの練習中だったのですが、わざわざ皆が知っていそうな曲を演奏してくださいました。教会を後にすると、からたちの生垣が特徴的な市内に唯一残っている武家屋敷、旧遊郭街（今は普通の住宅に使われています）を歩き回りました。日曜の午後ということで昨日見学した一番街付近は観光客でかなりのにぎわいでしたが、この付近には全く観光客は見られません。さらに、中院というお寺の境内にある、島崎藤村が義母に送ったという茶室を外から眺めました。付近は大きな木が多く、ちょうど紅葉もきれいでした。その後、重要文化財である東照宮、喜多院にたどり着き、ちょうど予定の４時に解散となりました。川越の奥深さに感動することが出来た町歩きでした。

美しいレンガ造の川越キリスト教会。

（千尋建築事務所　奥隅俊男）

オプションツアー２：
選び抜かれた材と最高の施工が光る昭和初期の和風建築、遠山記念館へ

もう１班は、川越から車で乗り合わせで車を走らせること20分、川島町の遠山記念館に向かいました。敷地は3000坪。日興證券を興した実業家遠山元一が母のために建てた邸宅のまわりを、濠、裏千家亀山宗月設計の茶室、墓所などが点在する広大な庭が囲んでいます。室岡惣七の設計（近くでは、入間に残っている石川製糸迎賓館も設計している建築家です）、元一の弟芳雄を総監督により、全国各地から集められた銘木で大工棟梁中村清次郎が2年7ヶ月を費やして施工、昭和11年に完成しました。

昭和43年に財団法人の認可を受けて遠山家のコレクションを納めた美術館を長屋門を入って右側に今井兼次設計による土蔵風の美術館を併設し、昭和45年から財団法人遠山記念館として開館し、公開されています。音楽評論家遠山一行氏の実家でもあります。

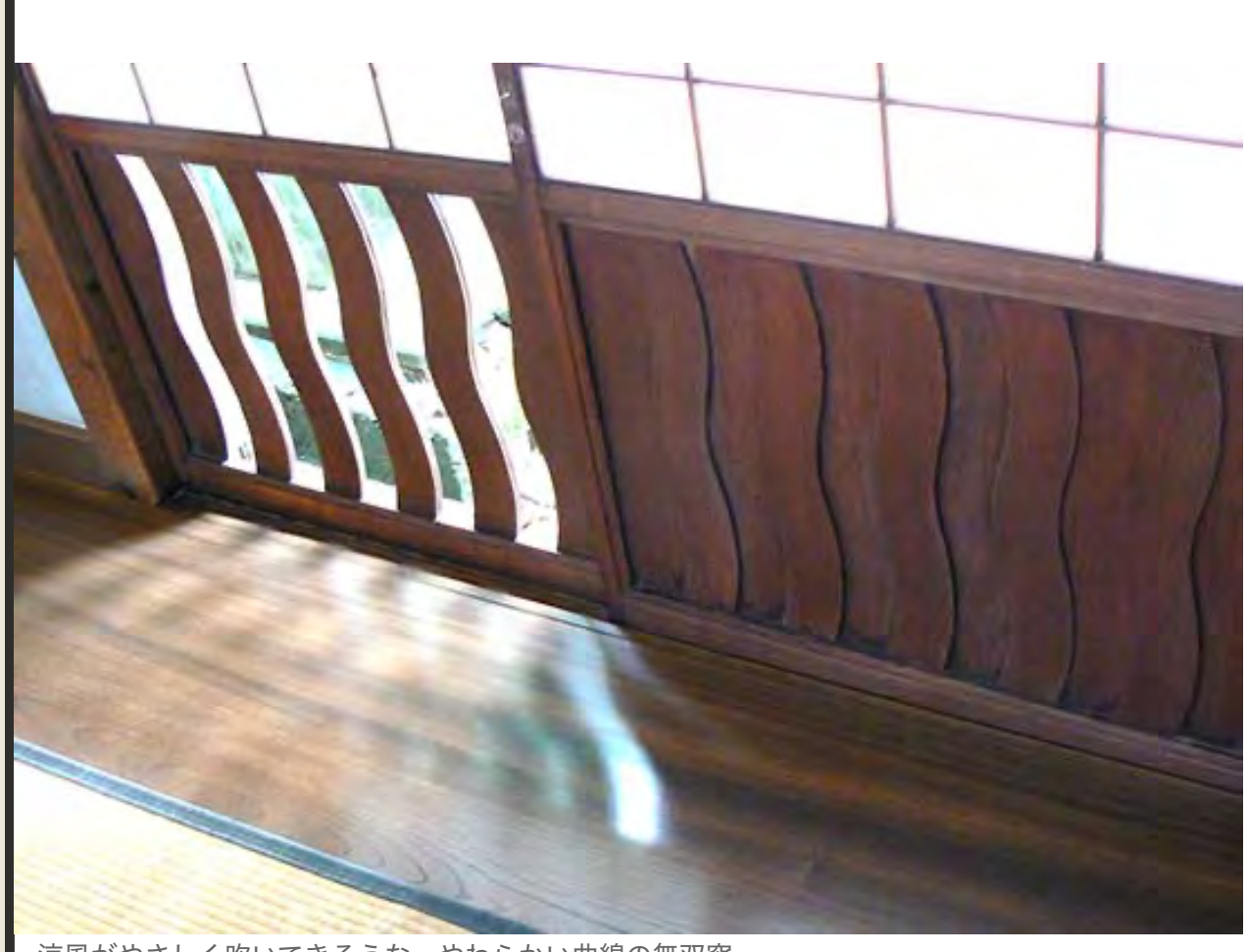
ガラス戸の縁の飾りがおしゃれな中棟の２Fから、東棟の茅葺き屋根を見る。

長屋門をくぐり、庭を通り、茅葺きの玄関から邸宅に入ります。関東の豪農の屋敷を思わせる東棟、賓客接待の間として使われた書院造りの2F建ての中棟、母の暮らしの場である京間の数寄屋造りの西棟と、性格のまったく異なる３棟が、渡り廊下でつながっています。

茅葺きの民家風、書院、数寄家づくりと、伝統的な要素の組み合わせてできている建物であり、一見、大工棟梁だけで建てたかのように見えますが、実際には室岡惣七という建築家による設計です。建築家に大工棟梁に対する畏敬の念があり、全体の設計の筋はきちんと通しているというバランスのよさが随所にみられます。

設計の工夫としては、賓客、ゲスト、使用人、住まい手であるお母さんと、公私ともども、ざまざまな人が出入りする空間に、きちんとヒエラルキーと秩序をもたせていること。どこにもかしこも贅を尽くしたような普請道楽とは違って、抑制が効いており、部屋の格に合わせて適切に材料を選び、用いています。また、大工、左官、建具、庭、設備、電気、全てに伝統を継承しながら、新しいもの（文化、技術、生活）にも敏感で、井戸水を石炭ボイラーでわかした全館給湯設備、浄化槽、各所に付けられた使用人呼び出しボタンといった、当時の最先端技術がいろいろと盛り込まれています。それでいて、そうは感じさせないのが、心憎いところです。

さて、遠山記念館を訪れた木の家ネットメンバーはといえば、学芸員が説明をする前から、あっちこっちの細部に目を見張り、驚嘆の声をあげ、そこらじゅうが、見所のような建物なので、学芸員さんが順路どおりに誘導して説明してくれようとするのですが、なかなかその通りに進みません。なにしろ、それぞれに興味をもつところが違うのですから・・・。



涼風がやさしく吹いてきそうな、やわらかい曲線の無双窓。

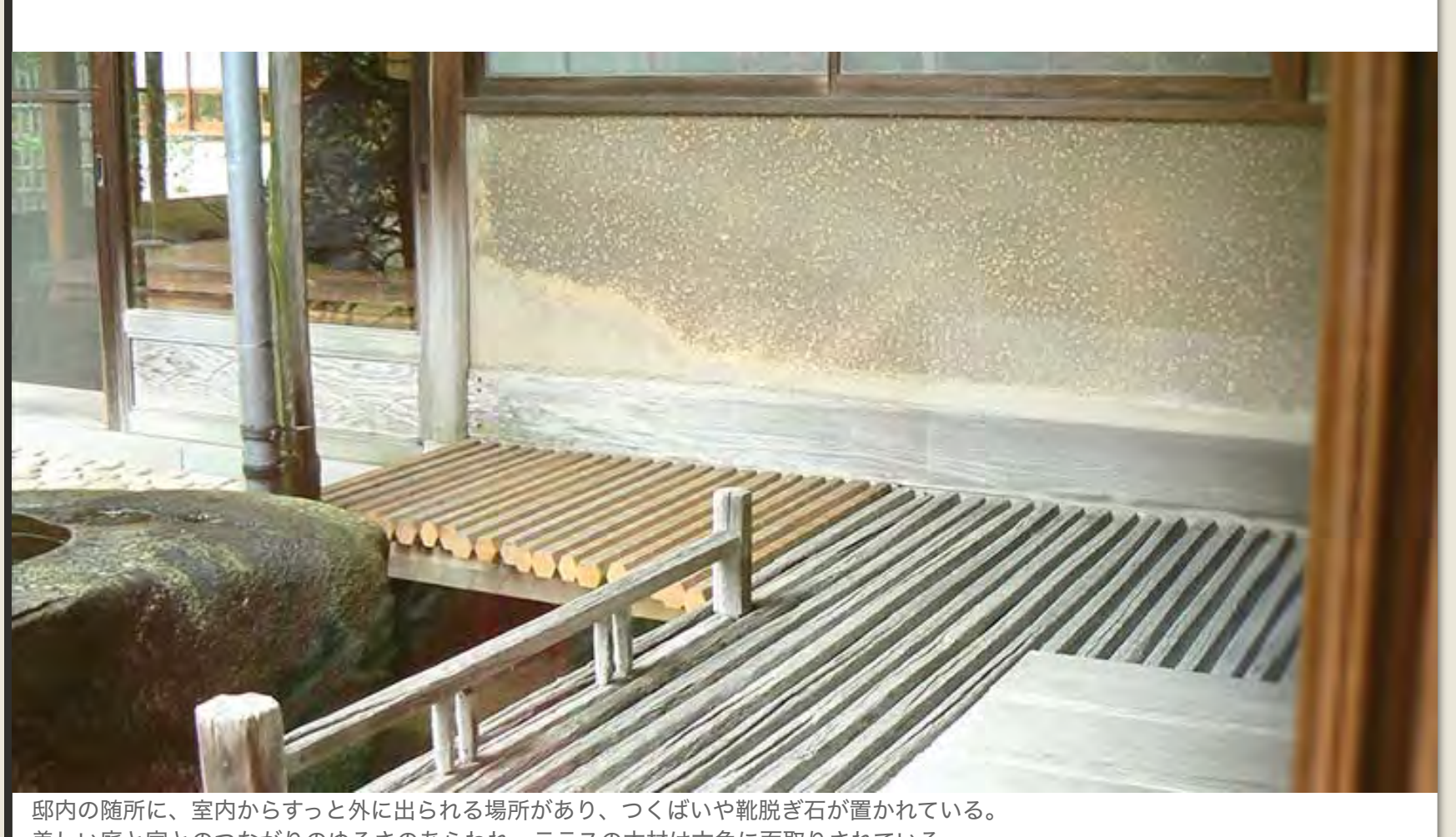
まず宮内寿和さんは、表玄関の格子天井の材に目を見はり、欅の梁の納め方の合理性に感嘆の声を挙げる。和田善行副代表は、床の間の欅の一枚板が床脇の地袋の奥まで入っているのに感心する。和田勝利さんは、五寸角の四方柾の通し柱の位置におどろき、加藤長光代表は天井板のスライスの仕方に、岩波正さんは3段になっている丸面の廻縁に感嘆する。古川保さんはガラスの無双窓のデティールへのこだわり方に、佐々木文彦さんは出窓と雨戸の納まりに「こんなの見たことない！」と驚き、高橋義智さんは精緻な象嵌細工のほどこされた家具の材がなんだろうと疑問を膨らませ、川村勝美さんは桐の一枚板の仏壇扉に金泥で雲を描いた細工に感嘆し、寺川さんは朝日が気持ち良く入るであろう廊下の足下の無双窓を発見し、バリアフリーに慣れきった若い某建築士は廊下から上座の座敷きに踏込み違えてつまずき、僕はトイレの塗り壁の、時間がたつに連れて色が浮かび上がってくる左官仕事に目を見張りました。そして今回は、普段は公開していない2階にまで、特別に上がらせていただきました。2階はこれは又別格ですなあ。僕は段鼻が丸面になっている、2階までの階段に感激しました。

それぞれの細部については、遠山記念館のサイトで結構詳しく見ることができます。「邸内めぐり」をクリックしてみてください。

遠山記念館

庭もなかなかのものです。みんなつくばいの前の水琴窟で柄杓で水を掬って音を楽しみ、座敷きからの見える富士山を眺め、特に邸内から庭を見るとに目に入る建具の納まりとガラスの精度と相まって、それぞれの部屋からベストな角度で見えるように設計された庭を、十分に味わいました。

木の家ネットの、こだわりの強い、口うるさいプロの面々が、それぞれに自分の問題意識で、さまざまな部位のレベルの高さ、精緻さ、部材の良さに感嘆の声を挙げることができるのは、先ず、全体の構成のよさ、どこにも違和感を感じない調和、「スッキリさ」加減がこの建物のベースにあるからなのではないかと感じました。きっと一人一人もそれをちゃんと理解していて、細部に驚嘆していたのでしょう。



邸内の随所に、室内からすっと外に出られる場所があり、つくばいや靴脱ぎ石が置かれている。
美しい庭と家とのつながりのゆるさのあらわれ。テラスの木材は六角に面取りされている。

そして、設計や施工以前に、材料がすばらしい。全国から最上の、跳び切りの木材を集めてつくるという贅沢が尽くされていました。そのようにしていい材を選んでく「目利きの目」そしてその価値を「評価できる鑑賞眼」があってこそ、木の文化が作られて来たのです。流通や工業化が進んでいない当時は、材の地産地消というのはあたりまえで、わざわざ選んでくるのが「文化」だったのです。安いから遠くからもってくる、ということはありませんでした。

僕は、若い頃から機会あるごとにこの建物を見学に来ていました。東京にこれだけ近くて、気楽に見ることができて、しかも保存方針と保存状態のいい、これだけすばらしい木造の建物はそうありません。木造を勉強する教材として若い友人を連れて行ったこともありました。そんな気軽に訪れることのできる、別格の木造住宅なのです。

そして、邸宅自体に圧倒されて印象が薄かったのですが、併設の美術館は今井兼次の最後の作で、控えめな配置と自然光併用の展示計画、ドアの引手、階段の手摺等、細かいところまで考えつくされたもので、これだけでもなかなか見る甲斐があるものです。みなさんも一度訪れてみてはいかがですか？

（吉田晃　吉田晃建築研究所）

1　2　3

総会後の記念撮影。全国から集まったつくり手たちは、みんな笑顔。

関連する記事はこちら

鈴木祥之先生(立命館大学教授)：伝統構法で使える耐震設計法を探る

このまちにずっと残っていてほしいあの家も「既存不適格」？

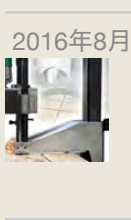
越海興一 室長(木造住宅振興室)：国交省木造住宅振興室室長に訊く「200年住宅」

NPO関善賑わい屋敷・曳家工事：この家が動く！

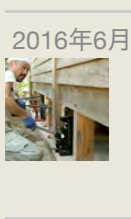
伝統構法をユネスコ無形文化遺産に！

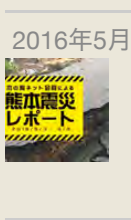
木の家イベントカレンダー

最近の特集記事


2016年12月23日
掛川総会

2016年8月2日
込み栓角ノミ 復活！松井鉄工所訪問記


2016年6月21日
熊本震災レポート2

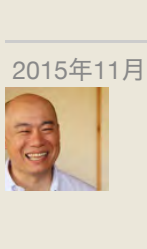

2016年6月9日
大工たちによる「家探し」の記録

2016年5月21日
熊本震災調査レポート

2016年4月28日
古川 保の熊本市川尻町 震災日誌

2016年3月31日
2/16 衆議院第二議員会館 調査報告会レポート

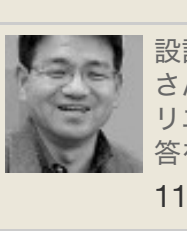
2016年1月27日
地域型住宅の省エネルギーを探る～2016.1.17 京都フォーラム報告


2016年1月14日
第15期 木の家ネット総会 高知大会～会員発表編～

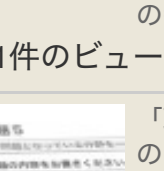
2015年11月13日
工務店・小田貴之さん（オダ工務店）：木の家づくりのプロデューサー

人気のある記事

冬の温熱調査合宿報告
15件のビュー


大工たちによる「家探し」の記録
13件のビュー

設計士・丹羽明人さん(丹羽明人アトリエ)：納得できる答を探して
11件のビュー

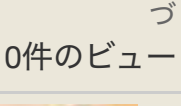

第三回これ木連フォーラム「伝統構法はこれからどこへ向かうか？」の報告
11件のビュー

「職人がつくる木の家」づくりを未来につなげるアンケート
11件のビュー

古川 保の熊本市川尻町 震災日誌
11件のビュー

伊勢神宮遷宮・御杣始祭：300年の大木を伐る！
11件のビュー

込み栓角ノミ 復活！松井鉄工所訪問記
11件のビュー


工務店・西棟正幸さん(ビオフラス西棟デザイン)：北海道で無垢の木の家づくり
10件のビュー

設計士・川端眞さん（川端建築計画）：小さな場の木の家
10件のビュー

この記事のタグ

このまちなみを次世代に
建築基準法と伝統構法
顔の見える関係

同じタグがついた別の記事

2009年11月27日
「職人がつくる木の家」づくりを未来につなげるアンケート

2005年12月25日
土壁告示

2006年4月25日
新しい道理と古い道理？ 新潟地震調査報告

2008年7月26日
このままでは伝統構法の家がつくれない！

2009年3月25日
「伝統木造のこれから」大橋好光教授の展望は？

事務局
〒711-0906
岡山県倉敷市児島下の町5丁目7-3
児島舎内
mail：jimukyoku@kino-ie.net
tel：086-486-5464